

## 『ひょうご歴史研究室紀要』第二号の刊行にあたって

『ひょうご歴史研究室紀要』第二号の刊行にあたり、ご挨拶申し上げます。

二年目に入った「ひょうご歴史研究室」ですが、紀要創刊号（平成二八年三月刊行）は、「特集『播磨風土記』研究の新天地」として刊行されるとともに、各論考は研究室のHPにも掲載されました。その後、卷子本「播磨国風土記」の全幅展示を、兵庫県立考古博物館との共催企画として実施し（九月一日から二五日まで）、あわせて展示期間中の九月一七日（土）には、ひょうご歴史文化フォーラム二〇一六として「播磨国風土記」をテーマに、古代史・考古学双方からの報告と討論が行われました。モニター聴衆を含め参加者数二六二名という人数は、わたしたちの予想を超えるもので、「播磨国風土記」がいかに地域の文化遺産として関心が持たれているか、納得した次第です。その後、明治大学日本古代学研究所との共催で「播磨国風土記」に関するシンポジウムが開かれ、東京でも「播磨国風土記」への関心が生まれています。

二年目の中心テーマに据えている「赤松氏と山城研究」については、平成二八年七月、兵庫県教育委員会と大手前大学の間で「ひょうごの歴史文化遺産の地域振興への活用に関する調査・研究に関する協定書」が締結され、「赤松氏と山城研究」推進のバックボーンとなりました。その後、提携事業の第一歩として一二月一七日、シンポジウム「赤松氏研究の新展開―権力確立の過程を探る」が大手前大学で開催され、一七〇名の参加がありました。「播磨国風土記」に負けない人気が、「赤松氏と山城」にもあるのは間違いありません。

さらに赤松館跡の所在する上郡町では、県文化財課の指導を受け、一〇月から町が主体となって赤松居館跡の試掘調査が始まりました。それに先だって進めた赤松村の絵図調査によって、江戸時代の村絵

図にも館跡は明瞭に示され、赤松氏亡き後も地元で長く「聖なる場所」として保存・伝承されてきたことが分かりましたが、その場所に発掘の手が入られるのですから、否応でも期待が高まります。すでに礎石や土器片が発見されたとの報道が出ており、伝承の確かさが証明される日も近いと予想されます。その上郡町に五月、挨拶に伺った折、三木一司教育長から聞いた話は感動的でした。赤松小学校が修学旅行で京都に赴き、金閣寺を訪ねると、同寺は生徒たちに対して特別の拝観を用意してくれているというではありませんか。金閣寺を建立した足利義満が幼少の頃、播磨守護赤松則祐の下で避難生活を送った際の恩義を、このような形で赤松地区の児童たちに返しているのです。なんとこの歴史の力でしよう。詳しくは本誌「歴史遺産活用」をご参照ください。

『ひょうご歴史研究室紀要』第二号では、「赤松氏と城館研究の現状と課題」を特集しています。内容については「特集にあたって」をお読み頂きたいと思いますが、『赤松家播備作城記』の全文翻刻は本誌の目玉とあっていいのではないのでしょうか。大手前大学史学研究所とひょうご歴史研究室共同の成果としてひろく活用されることを期待します。

なお昨年度以来、集中的に取り組んでいる「播磨国風土記」についても研究はすすみ、この成果を二本の論文とフィールド・レポートとして掲載いたしました。今後とも、ひょうご歴史研究室に対するご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

平成二九年三月

兵庫県立歴史博物館長・ひょうご歴史研究室長

藪田 貫